

挨拶表現「お疲れ(さま)」について：誤用における相互主観化

登 田 龍 彦

The Use of the Greeting *Otsukare(-sama)*: Intersubjectification in Abusage

Tatsuhiko TODA

(Received October 4, 2004)

1. はじめに

言葉が時代と共に変化するのを避けることはできない。言葉の誤用とまでは言わないまでも渾沌たる言葉の使用状況の真只中にいると、違和感を覚えて言葉の使い方を正したくなる衝動にかられる。しかしながら、それと同時に、言葉の変容性や不明瞭性の中に言葉の意味変化の方向性を感じ取れる醍醐味を味わうこともないわけではない。小論では、学生などの若者による挨拶表現として、最近頻繁に耳にする「お疲れ(さま)」という表現を取り上げ、意味変化の方向性の視点からその用法について議論する。

議論構成は次の通りである。まず、「お疲れ(さま)」について辞書を参照しながら一般常識的用法について確認した後、学生の間で最近よく使用される「お疲れ(さま)」の挨拶表現としての用法(以下「新用法」と呼ぶ)の特徴について検討する。次に、意味変化における相互主観化(intersubjectification)という文法化に係わる概念が、挨拶表現「お疲れ(さま)」の新用法の生起に関与していることを明らかにする。最後に、問題の表現を類似した他の日英語の表現と比較対照することによって、その特殊性と普遍性について考察する。

2. 「お疲れ(さま)」の談話的意味

まず、以下の例を考えてみよう。

- (1) a. 学生：お疲れさまです。
 教員：お早う。 (午前の最初の挨拶)
- b. 学生：お疲れさまです。
 教員：こんにちは。 (午後の最初の挨拶)
- c. 学生：お疲れさまです。
 教員：さようなら。 (別れ際の挨拶)

(1a-c)における学生と教員との対話は、大学で最近頻繁に交わされる会話である。(1a)は午前中の挨拶であり、(1b)は午後の挨拶であり、(1c)は午前と午後の別れ際での挨拶である。また、以下の(2)に示すように、一度挨拶を交わした後も、廊下等で会う度に学生から「お疲れさまです。」と挨拶されることもある。

- (2) 学生：お疲れさまです。
 教員：... やあ....

「お疲れさま」という挨拶表現を聞く前は、午後での会話でもその日に初めて会った時には、「こんにちは」ではなく「お早うございます」と学生から挨拶されることが多かった。

- (3) a. 学生：お早うございます。
 教員：(やあ)お早う。 (午前の最初の挨拶)
- b. 学生：お早うございます。

教員：こんにちは。 (午後の最初の挨拶)

b' 学生：こんにちは。

教員：こんにちは。 (午後の最初の挨拶)

つまり、最近学生たちによる会った時と別れる時の挨拶表現が「お疲れ (さま (です)).」に一元化しているように思える。この用法の変化は以下のように図示できる (午前と午後の挨拶は最初に会った時に交わすことばという意味に限定して議論を進めるので、以下では「最初の」という修飾語を省略する)。¹⁾

- | | | | | | | |
|-----|----------|-----------|---|------------|---|---------------|
| (4) | (午前の挨拶) | お早うございます。 | → | お早うございます。 | → | お疲れ (さま (です)) |
| | (午後の挨拶) | こんにちは。 | → | お早うございます。 | → | お疲れ (さま (です)) |
| | (別れ際の挨拶) | さようなら。 | → | さようなら。 | → | お疲れ (さま (です)) |
| | | [正用法] | | [数年前の若者用法] | | [現在の若者用法] |

しかしながら、学生たちの使用する新用法は二つの点で誤用と言える。

まず、小学館『日本国語大辞典 (第一版)』の「お疲れ (さま)」という挨拶表現の定義を見てみよう。

- (5) お-つかれ【御疲】『名』(「お」は接頭語) 疲れたと思われる人を敬い、同情の気持ちでいうあいさつの言葉。<<方言：(i) 夕方のあいさつことば。群馬県、新潟県。長野県。高知県 (ii) 午後のあいさつことば。山梨県。

- (6) おつかれ-さま【御疲様】『名』(形動)「おつかれ (御疲)」の丁寧な言い方。

この定義からすると、「お疲れ (さま)」という表現は仕事に打ち込んでいる人や仕事で疲れた人に発せられるのが普通である。が、学生は、その日の午前中に最初に会った人に対してこの表現を使用しているという点で誤用と言える。

次に、一般的に「お疲れ (さま)」という表現は、三省堂『明解国語辞典 (第五版)』でも指摘しているように、目上の者から目下の者に対する挨拶表現であるが、新用法は目下の者 (学生) から目上の者 (教員) に対する挨拶表現となっている点で誤用と言える。²⁾

小論では、学生をはじめとする若い世代の人々が現時点では正用法とはいえないこの新用法を駆使する局面において、(あるとすれば) どのような原理が作用しているのか議論する。換言すれば、若者たちはどのような原理・原則に従って新用法を生み出したのか探してみたい。その際、ことばの意味変化という視点からその原理・原則の一般性について考察する。

考察に入る前に留意しておきたいことは、言葉の意味が「変化する」という意味である。厳密に言えば、言語表現それ自体の意味がある問題の意味に「なる (become)」「あるいは「変化する (change)」というのは、話者がそのような問題の意味で当該の場面・文脈で使用するようになるということに他ならない。これは、Traugott and Dasher (2002:27) の法助動詞 must の意味変化についての見解すなわち「時の経過とともに話者が根源的概念だけでなく認識様態的概念も表現するために must を使用するようになる (come to use)」(下線筆者) という見解と同じである。つまり、「お疲れ (さま)」という表現が「お早う」と言うべき場面・文脈で使われるようになるのであって、「お疲れ (さま)」という表現それ自体が「お早う」の意味を表すようになったというものではない。

3. 「お疲れさま」の相互主観性

まず、新用法の「お疲れ (さま)」という挨拶表現を、「お疲れ」と「お疲れさまです」の二つの用法に分ける必要がある。以下の会話例を考えてみよう。³⁾

- (7) 学生：お疲れ (さま (です)).
 学生：お疲れ (さま (です)). (午前・午後・別れ際の挨拶)
- (8) a. 学生：お疲れ # (さまです).
 教員：# お疲れ / お早う|. (午前の挨拶)
- b. 学生：お疲れ # (さまです).
 教員：# お疲れ / こんにちは|. (午後の挨拶)
- c. 学生：お疲れ # (さまです).
 教員：} お疲れ (さま) / 御苦労さま / さようなら|. (別れ際の挨拶)

(7) における「お疲れ」は基本的に同学年の学生たちの間で交わされる挨拶表現で、先輩・後輩の関係では「お疲れさま」と「お疲れさまです」等の丁寧表現も可能となる。また、「お疲れ(さま)」は、帰宅する者からまだ部屋に残っている者に対して発話されることもある。これに対して、(8)でも示されているように、学生の方から目上の教員に対しては「お疲れさまです」のみが使用され、「おつかれ(さま)」という表現はの場合使われない。特に(8c)の別れ際の教員から学生への返答の挨拶としては、(1c)で既述した表現「さようなら」の他に「お疲れさま」や「御苦労さま」等も可能となる。ここで興味深い事実として指摘したいことに、学生達は「お疲れ(さま)」と「御苦労(さま)」の違いを認識していて、教員に対して「御苦労さまです」を使わない。

(9) 学生：#ご苦労さまです。

教員：|お早う/こんにちは/さようなら/やあ|。

小学館『日本国語大辞典(第一版)』では「御苦労(さま)」を以下のように定義している。

(10) ごくろう【御苦労】『名』(形動) (「ご」は接頭語) ①ある人を敬って、その苦労をいう語。②他人の骨折りを感謝することば、たいぎ。③骨折りが無駄に見えることを多少の嘲笑を含めていうことば。

(11) ごくろう-さま【御苦労様】(形動) ①他人の骨折りを感謝するていねいなことば、あいさつ語として、語幹だけで用いることが多い。②苦労が無駄にみえることを嘲笑していうことば。

「お疲れ(さま)」と「御苦労(さま)」の各定義から判断すると、両者の用法の相違は一見大差ないように思えるが、学生たちは明確に区別している。今だかつて一度も学生たちから「ご苦労さまです」と声をかけられたことはなく、また彼らに意見調査したところ、教員に対してだけでなく友人たちにも挨拶表現としては使わないという返答であった。両者の違いは、語彙的特異性に依るものであろう。もし「疲れている様子」や「苦労した様子」を示す表現としての語彙の意味から会話での挨拶表現に転用可能であれば、「お疲れ(さま)」ではなく「御苦労(さま)」という表現が何故問題の新用法を獲得していないのか考えねばならない。現時点ではこの間に対する明確な解答を与えることはできない。しかし、推測として言えることは以下の点である。「苦労」というのはかなりの努力の過程を含意し、使用するのを若者は敬遠する。これに対して、「疲れ」は誰でも倦怠感を抱くのでその言葉の使用に関して抵抗感はないのではなかろうか。退出の際の「お疲れ(さま)」は、聴者に対して話者が共有・共感する疲労感に対するねぎらいの言葉として使用される。これに対して、「御苦労(さま)」は聴者の行為に対する目上から目下へのねぎらいの言葉としてのみ使用される様に思われる。⁴

以上の考察から指摘できる新用法の「お疲れ(さま)」の特異性は、午前午後を問わず別れ際でなく最初の挨拶表現として使用されている点にある。「お疲れ(さま)」は、普通仕事が終わる労をねぎらう意味での挨拶表現であるが、新用法では仕事に出かけて来てまだ仕事に取りかかっていない人に対しても使われている。小論では、この「お疲れ(さま)」の新用法の発達に文法化に伴う意味変化における相互主観化という概念が関与していることを指摘したい。

文法化における相互主観化は、以下のように定義される。⁵

(12) 主観化(subjectification)は意味がより話者(あるいは著者)寄りになるメカニズムであるのに対して、相互主観化(intersubjectification)は意味がより聴者(あるいは読者)寄りになるメカニズムである(Traugott(2003:129))。

まず、相互主観化の具体例として(13)に示す英語のlet's表現の発達を取り上げ、Traugott(1995, 2003)の記述に従いながら見てみよう。

(13) let us 'allow us (imp)' > let's > 'I propose (hortative)' > 'mitigator/marker of "care-giver register"'

許可を意味するletとusが結合して「我々に～させてくれ」という命令形が一般化し、話者による奨励の表現let'sという定型表現が派生した。この段階は主観化の段階である。この段階は、更に「介護人の言語使用域」の標識と言える緩和表現の段階へと発達した。この段階が相互主観化の段階である。このような発達の三段階を示す各々の用例は、(14)の(a)から(c)のようなものである。

(14) a. Let us go, will you ?

b. Let's go, shall we ?

c. Let's take our pills now, Roger.

(14a, b)の付加疑問節から分かるように、「行く」という行為の主導権はletの主語のyouから話者のwe(あるいはI)に移っている。(14c)では、属格ourの使用からも窺えるように、話者は聴き手のRogerが錠剤を飲みたがらないことに対して同情している。ここでは、(14b)の段階と異なり、問題の行為の実行予定者は聴者(Roger)

だけである。

更に、以下の例を考えてみよう。

(15) Pray, give me leave.

周知の事実であるが、文頭の Pray は、I pray you の人称代名詞の I と you を省略した短縮表現で、「嘆願する」という意味ではなく「どうか」という意味の明示的な丁寧表現として使用される。この場合、話者による聴者寄りの意味すなわち相互主観的意味が pray に記号化されている。

さて、相互主観化の視点から問題の新用法の「お疲れ(さま)」の表現について考えてみよう。共時的に見て、現代日本語の「お疲れ(さま)」の用法は、次のようにまとめられる。

- (16) a. 話者が聴者の「疲れている」様子を敬って表現する。
 b. 話者が帰宅する聴者に対するねぎらいの挨拶表現として使用する。
 c. 話者が通学・出勤して来た聴者に対する(最初にかける)挨拶表現として使用する。
 d. 帰宅する話者が(まだ仕事をしている)聴者に対して別れ際に発する挨拶表現として使用する。

(16a, b) の用法は、若者の間だけでなく普通一般に容認される。これに対して、(16c, d) の用法は、若者の間だけで通用している。小論では、後者の(16c, d) の用法を新用法の「お疲れ(さま)」として定義付けて考察してきた。換言すれば、(16a) の文字通りの意味は言うまでもなく、(16b) の挨拶表現としての談話的・語用論的意味も、意味論化(semanticized)され、国語辞書に記載されている。しかし、(16c) と (16d) の意味は、まだ一般化もせず当然意味論化もされず辞書において定義的意味としての扱いを受けていないと思われる。特に(16d) の場合は、「お疲れ(さま)」が疲れている話者自身によって居残って仕事をする聴者に対するねぎらいのことばとして使われ、談話的・語用論的には「お先に(失礼します)」を意味する。では、このような新用法の発達における相互主観化のメカニズムとはどのようなものであろうか。既述した(12)の定義に従えば、新用法は話者による聴者への配慮を表現する用法であると言える。すなわち、(16c) は、発話時において仕事による疲れを厭わず出勤してきたことに敬意を表すと同時にそれ以降の聴者の勤勉・努力による疲れを話者が先取りした用法である。(16d) は、勉強・仕事を継続している聴者に対して話者が同情し、(共有した)疲れをねぎらうことにより先に失礼する一種の申し分けを表現する用法と言える。(16c, d) の用法には、話者の聴者に対する気配りの意味が表されていて丁寧表現の一種である。要約すれば、(17)にも示す通り、(16a) から(16b)への用法の変化には、主観化が係わっているのに対して(注5)参照)、(16c) と (16d) への更なる用法には相互主観化が係わっている。

(17) (16a) ⇒ (16b) ⇒ (16c, d)
 (主観化) (相互主観化)

(16a) から(16b)への段階では、疲れている様子の描写から語用論的・対人的な挨拶表現としての変化が見られる。(16c) から(16d)への段階では、意味がさらに聴者寄りになって疲れを先取りしたものに変わっていると思われる。

本節では、「お疲れ(さま)」表現の新用法には、主観化だけでなく相互主観化が係わっていることを指摘した。そこで次節では、他の同種の日本語表現や英語表現の用法についての比較対照を行ない、新用法表現の特異性と一般性について考察する。

4. 「お疲れさま」の新用法の特異性と一般性：「御馳走さま」と“Good day!”との比較対照

日本語には、「お疲れ(さま)」と同種の聴者の努力をねぎらう「御馳走さま」という表現がある。この表現は、小学館『日本国語大辞典(第一版)』では次のように定義されている。⁹⁾

- (18) ごちそう-さま【御馳走様】《名》(形動) (「さま」は接尾語) ①馳走になったものが礼としていうことば。多くは食事のあとの挨拶(あいさつ)にいう。②男女の仲むつまじい様子を見せつけられたとき、その男女に対して、からかっていう語。(下線筆者)

小論で問題になるのは①の意味である。下線を引いたように、「御馳走さま」という表現は食事の後に発話されるのが一般的であるが、食後に限定されるとは限らない。事実、用例として以下のような食事の前の表現が挙げられている。

- (19) a. 【御馳走様(ゴチソウサマ)】とお光が運ぶ鮎の大皿を見ながら—国木田独歩、『酒中日記五

月一日

b. 膳が運ばれた。〈略〉馴染(なじみ)の客だけにする。それは、久さんの心いれだった。

『親方、御馳走さま』と、紅蓼は久さんに声をかけた一久保田万太郎。『続末枯』

確かに、(19)の用例は「御馳走さま」が鮎などを食べる前に発話されているが、「御馳走になります」というほどの意味で使用されている。日常の食卓で食べ物を目の前にして、「いただきます」と言う代わりに「御馳走さま」という若者はいないと思われる。しかし、(19)などの場面で、食事を先取りして「御馳走さま」と発話することは可能であろう。この点、「御馳走さま」は「お疲れ(さま)」と似ている。しかし、「お疲れ(さま)」との相違点として、「ああ、美味しかった。御馳走*(さま)」に見られるように、食事後の挨拶として「さま」を省略できない点をあげることができる。「御馳走さま」は、「お疲れ(さま)」と異なり、そのイディオム性の強い定型表現といえる。換言すれば、「御馳走」は「御馳走さま」と意味が異なり食事後の挨拶を表わさないのに対して、「お疲れ」は人の疲れている状態を表わすだけでなく「お疲れさま」と同様に挨拶表現としての意味機能も持っている。

次に、「お疲れ(さま)」の新用法に該当する英語表現 Good day! について考えてみよう。研究社『新和英大辞典(第五版)』には、以下のような「お疲れ(さま)」の訳例が挙げられている。

- (20) おつかれさま【御疲れ様】〔仕事が終わった人をねぎらう言葉〕 Thanks! That's enough for today [Let's call it a day]. / Thanks for all your hard work (today).; 〔仕事をしている人へのあいさつ〕 Hard at it, I see. こんにちは～でした. All your efforts today were very much appreciated. /～です (= こんにちは). Good day!

興味深いことに、(20)の最後の用例で、「おつかれさまです」に「こんにちは」の意味を認めて Good day! と英訳してある。その他の用例は、小論で問題にしている新用法ではない。既述したように、「お早う(ごさいます)」の意味はまだ意味論化していない。しかし、「おつかれさまです」に「こんにちは」の意味を認めるのであれば、「おつかれ(さま(です))」に「さようなら」の意味も当然加えて記述するべきであろう。その場合も、Goodbye! だけでなく Good day! で表現可能である。Longman Dictionary of Contemporary English³ は good day に以下のような定義を与えている。

- (21) good day: 1 especially AustrE, NZE an expression meaning hello, used when you are greeting someone especially in the morning or afternoon
2 especially BrE, old fashioned an expression used to say hello or goodbye

Good day! は、オーストラリアやニュージーランドでは午前と午後の「こんにちは」の意味で使用される表現であり、英国では古風ではあるが「こんにちは」だけでなく「さようなら」の意味でも使用されるらしい。⁷⁾ OED に依れば、Good day! は会った時や別れのときの挨拶として使用される句であり、命令表現の Have good day! あるいは祈願文の God (give) you good day から派生したと考えられる。従って、問題の省略形は、(15)の Pray と同様に、聴者寄りの意味を含んで相互主観的表現と言える。⁸⁾

元来「お疲れ(さま)」が人の状態・状況についての表現であるのに対して、英語の Good day! は人に対する能動的な表現になっている。これは、日英語の発想に係わる表現構造の違いに由来するものと思われる。例えば、Hinds(1986)の言う日本語が状況中心であるのに対して、英語が人間中心であるとか、池上(1981)に従って、前者が「なる」的言語で後者が「する」的言語であると言えるかもしれない。しかし、小論ではこの点にはこれ以上立ち入らないで、日英両言語の挨拶表現において相互主観化が深く関わっていることを強調しておきたい。挨拶表現というものは、そもそも相手との言葉のやり取りを通して人間関係を円滑に保つことを目的とした言語使用すなわち交感的言語使用(phatic communion)であるので、相互主観的に他ならない。

5. おわりに

若者言葉「お疲れ(さま)」の新用法は、誤用と烙印をおされて日本語の「乱れ」の典型例として指摘されることもあるかもしれない。しかし、小論では、その新用法が意味変化に係わる相互主観化という言語変化の一般的傾向を示す一例であることを明らかにした。若者の「お疲れ(さま)」は、言語使用における「乱れ」とは言い難い丁寧表現の一種と考えるのが良さそうである。

注

* 草稿の段階で、阿部幸一氏（愛知工業大学教授）から貴重な助言を頂いた。また、元村紀美子、鶴本沙織、長尾佳奈子、深水のり子の学生達から、若者の挨拶表現の現状についての重要な情報を得た。ここに記して、感謝したい。

1) (1)-(4)における発話は学生から教員に対するものであるが、学生から教員への返答の場合でも、個人差はあるが、新用法の表現が使用されている。

- (i) a. 教員：お早う。
学生：お疲れさまです。（午前の挨拶）
- b. 教員：こんにちは。
学生：お疲れさまです。（午後の挨拶）
- c. 教員：さようなら。
学生：お疲れさまです。（別れ際の挨拶）

小論での若者言葉「お疲れ(さま)」についての資料(分析)は、筆者の体験だけでなく学生諸君との個人談話とインターネット上での(特に会社内での「お疲れ(さま)」表現についての情報(<http://okweb.jp/kotaeru.php3?=866098>)等に基づいている。

2) 『新明解国語辞典(第五版)』では、「お疲れ(さま)」を以下のように記述している。

- (i) 【おつかれ】 相手が疲れていることの尊敬表現。
【お疲れ様】 仕事に打ち込んでいる人や仕事を終えて帰る人にかけるねぎらいの言葉。〔一般に目上の人には用いない〕

3) #(X)の標記は、当該の表現がXの「さまです」が省略された場合に、語用論的に容認されないことを示す。後述するが、*印が付く場合は当該表現が非文法的であることを示す。

4) 「お疲れ(さま)」が大和ことばの「つかる 疲る」から来ているのに対して、「御苦労(さま)」は「苦労」という漢語から来ている。因に、「お疲れさま」と同義の漢語由来の「*ご疲労さま」は使用されない。これは、Aronoff (1976)の言う「阻止効果」によるものと思われる。また、「疲る」には「空腹になる、飢える。」という意味もあった。

5) Traugott (1995:32)は、文法化における主観化を以下のように定義している。

- (i) 文法化における主観化とは、大雑把に言って、発言内容に対する話者の信念や態度を文法的に同定できる表現が発達することである。これは段階的な現象で、当初は主に具体的、語彙的、客観的意味を表わしていた形式が局所的な統語的文脈で繰り返し使用されることによって、次第に抽象的、語用論的、対人的、話者志向的機能を示すようになる。

6) 因に、「馳走」の定義は以下の通りである。

- (i) (用意のためにかけまわる意から) 食事などのもてなしをすること、饗応すること、あるじもうけ、接待。また、そのためのおいしい食物、立派な料理、ごちそう。--『日本国語大辞典(第一版)』
- (ii) (その容易に奔走する意から) ふるまい、もてなし、饗応、④立派な料理、おいしい食物。--『広辞苑(第五版)』

7) 筆者の体験では、ボストンレッドソックスの本拠地フェンウェイ球場での野球中継で、アナウンサーは午後4時頃のテレビ放送の締めくくりの言葉として Good day! と言っていた。因に、ボストン近郊では、スーパーのレジ係との挨拶や通勤レールの車掌やバスの運転手との降車の際の挨拶等で、Good day! が「ありがとう」と「さようなら」の両方の意味で使用されていた様に思える。

8) 因に、OEDの完全形と(対格との共起する)省略形の初出年はそれぞれc1205とc1460である。英語のこの句は、仏語や独語の対応形 bon jour や guten tag などと比較すると頻度が低い。これは、英語では good morningの方が普通の表現であるからと、OEDは述べている。因に、Langenscheidt's Shorter German Dictionaryは Guten tag! を How d'you do? Good morning!; Good afternoon! とパラフレーズしている。また、『小学館プログレッシブ英和中辞典(第三版)』が指摘しているように、「さようなら」の場合の good day は、「こんにちは」の弱強型でなく強弱型の上昇調の音調を持っていて、用法の相違は明確である。

参考文献

- Aronoff, Mark (1976) *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hinds, John (1986) *Situation vs. Person Focus*. 東京：くろしお出版。
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』東京：大修館。
- 金田一京助他 (編) (1997) 『新明解国語辞典 (第五版)』東京：三省堂。
- 国広哲弥・安井稔・堀内克明 (1998) 『小学館プログレッシブ英和中辞典』東京：小学館。
- The Langenscheidt Editorial Staff (1970) *Langenscheidt's Shorter German Dictionary: German-English English-German*. Berlin: Langenscheidt.
- Murray, James A. H. et al (1933) *The Oxford English Dictionary*. 13 vols. Oxford: Clarendon.
- 日本大辞典刊行会 (編) (1978) 『日本国語大辞典』(縮刷版) 東京：小学館。
- 新村 出 (1998) 『広辞苑 (第五版)』東京：岩波書店。
- Summers, Della (2001) *Longman Dictionary of Contemporary English*. London: Longman.
- Traugott, Elizabeth Closs (1995) "Subjectification in Grammaticalization," In Dieter Stein and Susan Wright, eds. *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspectives*, 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs (2003) "From Subjectification to Intersubjectification," In Raymond Hickey ed. *Motives for Language Change*, 124-139. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher (2002) *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 渡部敏郎, Edmund R. Skrzypczak, and Paul Snowden (2003) 『新和英大辞典 (第五版)』東京：研究社。